

### (3. 共同研究班活動報告)

#### 3-1. 2016 年度「現代社会における〈共〉(コモン)をめぐって」

#### 班 活動報告

——協働でまちを変えていく「パーリー建築」の挑戦——

松村 淳

#### 1 研究会の主旨

現在の日本は「社会的総空間の商品化」と形容できる状況下にある。すなわち、都市や地方を問わず、商業空間や居住空間は交換価値を前景化した資本主義のロジックによって覆い尽くされており、その矛盾が800万戸を超す空き家の存在として顕在化していると考えられることもできる。しかも、これだけの空き家がありながら有効利用がなされていない場合が多い。行政の旗振りで様々な施策が打たれているが決定打はなく、事態の改善には程遠い状況である。しかし、そのような状況下、民間レベルでは様々な主体が多様な実践を行っており、そこに新しいムーブメントの萌芽を看取することができる。本研究会は、そのような都市における協働のあり方を社会的、人類学的に検討していくことを目的としている。

今回の研究会の講師は東京を拠点にセルフビルド建築を手がける「建築家」の宮原翔太郎氏である。宮原氏は成城大学で文化人類学を学んだ後、桑沢デザイン研究所にて建築デザインを学んだという経歴の持ち主である。彼の現在の仕事は、住宅の改修を中心とした建築に関連する業務である。彼は専門学校で建築を学んでいるものの、一級建築士の資格を持っているわけではない。また後述するようにその仕事のスタイルも、これまでの建築家とは異なるものである。

研究会は神戸市にある「海外移住と文化の交流センター」にて11月13日午後14時から行われた。参加者は我々コアメンバー(生井、加藤、松野、松村)の他にも、数名の社会学研究科の院生、研究員、また学部生にも参加いただいた他、外部からはNPO法人の主催者、神戸市の職員で空き家対策をされている方などに参加いただいた。

#### 2 日本における建築家小史

宮原氏の仕事を適切に位置づけるために、ここで日本における建築家の職能史を振り返り、彼らがどのような理由で地域づくりに乗り出しているのかを確認しておきたい。

建築家(architect)という職能は、建築物の設計と監理が主たる業務であり、医師や弁護士のようなプロフェッションとして認識されているものの、現実には公的な資格は存在しない非常に中途半端な位置づけを余儀なくされている。建築家自身による長年に渡る法制度化をめざ

す運動も虚しく、建築・建設にまつわる様々な職種を含みこみながら、最大公約数的に成立した「建築士」資格に統合され、建築家 (architect) としては公的な資格制度として確立することはなかった。

現代活躍している建築家は戦後、とりわけ 1960 年代以降の「社会的総空間の商品化」という状況下で成立していった。1960 年代以降、工業化住宅を大量に建設する住宅産業が成立し、それらが「販売」する画一的なデザインの住宅に対して、奇抜な素材やデザインで構成された「個性的」な住宅で勝負をかけた建築家は、消費社会の中で希少性とオリジナリティを獲得することで生き残っていった。つまり彼らは住宅産業の中にニッチな市場を開拓することに成功したのである。

また、建築作品のオリジナリティを担保するものとして建築家本人に対する注目も集まり、やがて彼らは、芸術・文化から工学知識にまで幅広く精通したルネサンス的万能人としての建築家を自覚的に演じることでいわば「消費社会における文化的スター」の座を確立していく。彼らは広い意味での「文化人」にカテゴライズされるが、作家や芸術家といった「文化人一般」と異なる点は、その人数的な規模に加えて、それが生業と結びついている点である。さらに、それは有名性を獲得した建築家を頂点に、全国規模の広大な裾野を持つヒエラルキーを構成している。そのように、日本における建築家は市民社会に支えられ国家から自立したプロフェッションとして確立している欧米の建築家とは違うかたちで、また国家的権威を背負った明治から戦前にかけての日本の建築家とも異なり、あくまでも消費社会と密接に関連した存在としてその歩みを進めていくのである。しかし、バブル経済崩壊後、「消費社会における文化的スター」という建築家像は脆くも瓦解したばかりか、強烈なバックラッシュに晒されるのである。それ以降建築家は「我々は社会にどのような貢献が出来るのか」という主題を自問自答し始め、「社会性」や「社会的」といった「社会」を接頭語とする語彙を頻繁に使うようになる。社会学者を招聘したシンポジウム等も頻繁に開かれ、「社会から建築家はどのような評価されているのか」という視点に自覚的になっていくのである。「我々は社会にどのような貢献が出来るのか」という問いはプロフェッションへの目覚めとして理解することもできるだろう。しかし、上述の通り日本の建築家を支えてきたのは消費社会のロジックであり、欧米のような「市民社会」によって建築家のプロフェッショナルリズムが支えられてきたわけではない。それ故に、建築家は彼らをプロフェッショナルとして支える市民組織、市民的な合意を何よりも必要とした。そこで、彼らが目をつけたのが市民的アソシエーションの礎であるコミュニティを含んだ「地域」であった。奇しくも 1990 年代半ば以降、二度の大地震や各地で頻発する中程度の規模の地震や水害等の災害を経る中で、地方や地域への国民的な関心が醸成されてきた。政府も地域主権や地方活性化に力を入れ始め「金や人」が地方に流れ始めた。そのような地域へと向かう政策的な方向転換は、地域コミュニティを基盤とした職能の再編・再構築と、新築需要に変わる改修・改築需要の掘り起こしという建築家の思惑と利害が一致した。そのような理由で建築家の地域への進出が一気に進んだのである。

彼らはそこで、まちづくり、リノベーションや、空き家再生といった「現代的課題」に取り

組んでいる。しかし、そこで見えてきたものは、地域コミュニティが促してくる無償の社会参加と、あくまでも仕事の対価としての報酬が得る有償のプロフェッション活動との狭間で葛藤する彼らの姿であった。一生活者として地域が抱える問題に取り組んでいくことに関してはやぶさかでない気持ちを持っていても、無償の活動ばかりでは生活が成り立たない。建築家の地域への進出は早くも大きな暗礁に乗り上げているかに見える。

### 3 建築家 2.0 の登場—宮原氏の事例から

一方で、そのような建築家の戸惑いと苦戦を尻目に、建築士の資格を持たない者や、建築家としての文化資本（学歴や職歴、受賞歴等）を持たない者達が地域づくりの面白さに目覚め、リノベーションや空き家再生を社会活動として手がけていく姿が目につくようになっていく。彼らは現在、地域づくりやリノベーションの現場で無視できない存在になっているが、ここでは彼らを「建築家 2.0」であると定義しよう。今回招聘した宮原氏のような事例である。先述したように宮原氏は専門学校で二年間で最低限の知識を学んでいるが、建築家として専門的なトレーニングを受けていない。宮原氏は専門学校で学んだ後、尾道のゲストハウスの改修を手伝ったきっかけから、リノベーションの面白さに目覚めたのだという。

現在、宮原氏は「持続可能な建築を作りたい」という目標を掲げ、「パーリー建築」という活動を実施している。「パーリー建築」とは、主に建物のリノベーションをしながらできるだけ多くの人に関与してもらうことで、ネットワークを形成し、ときにはパーティを開きながらそのネットワークを強固なものにしていくと同時に、周囲に向かって開いていくという試みである。

彼の言う持続可能な建築とは、たんに建物が永続するというものではなく、その中で展開される生活が健やかに続いていくことを指す。そのために大切にしていることが三つあるという。一つ目が地域の歴史や風土を大切にすること。普遍性を追求したモダニズム建築のような建物の対極にある建物、すなわち民家のような、「その土地から生えてくるような」建築というものをつくりたいという。

二つ目が工事現場にたくさんの人を呼び込むことだという。建物が完成した後もそこに人が集まるように、工事中から関心を持ってもらうことが目的だ。そのために、空き部屋をつかって様々なイベントを開催したりしている。そうすることによって、面白い生活をしているなど関心をもって来てくれる人がいるという。三つ目がその場所に住みながら、できるだけ施主と生活をともにしながら作ることであるという。

彼はそのようなルールを自分に課しながら活動を行っている。今のところ報酬は、「住む場所と食事」がメインであり、地方に行けば畑で収穫された野菜等が得られる。最近では、少しずつ金銭的な報酬を得られる目処がたってきたということで、2017年春からは中国地方に定住しながら、活動を続けていくという。



写真1 研究会の様子



写真2 ゲストスピーカーの宮原翔太郎氏

#### 4 新しいプロフェッションの萌芽

今回の宮原氏の報告から明らかになったことがいくつかある。まずひとつは、建築家の現場が新築から改築へと移っていく大転換期である現在、建築家としての過去の実績は絶対的なものではなくってきているということである。かわって浮上してきているのは、現地の人々との深い関わりを構築できるコミュニケーション能力や様々なイベントを企画できる企画・実行力であるということである。そのような状況は、芸術家としての建築家を至上のものとして崇め、理想とする哲学が埋め込まれた大学教育などにも徐々に影響を与えていこう。

そして二点目が、プロフェッションを支える信頼構造の変化である。アンソニー・ギデンズは、建築家や大工のような技術的専門家システムは信頼を本質的にあてにしていると述べる。その信頼は過去の実績や経験に基づく「確信」だけによるものではなく、コミットメントへの跳躍であり最小限の「信仰」を含んでいると述べる（Giddens 1991=2005）。そのような「信仰」は建築家の身に付けた高度な知識や、それを身に着けた専門家に相応しい振る舞いによって強められてきた。建築家は「先生」と呼ばれ、クライアントとの関係はフラットではなかった。

しかし、宮原氏の事例では、そのような「建築家らしさ」は一切看取することができない。関係性はフラットで、情報はオープンにされ、徹底的にコミュニケーションが行われる。すなわち、宮原氏における専門家-クライアント間の信頼関係は「協働」をベースに構築されているのである。

さきに、欧米の建築家は市民社会において支えられ、彼らがプロフェッションとして成立している一方、日本ではそれが叶わなかったと述べた。しかし、宮原氏の事例は地域コミュニティというローカルな場所において、そして「協働」という条件下において、新しくプロフェッションが育っていくためのシーズとして見ても大変興味深い事例であった。

#### 【参考文献】

Giddens, Anthony 1991, *Modernity and Self-Identity Self and Society in the Modern Age* (=2005, 秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ-後期近代における自己と社会』ハーベスト社)